

読書感想文中学生の部 最優秀賞

百年の意味

筑波大学附属中学校 3年 堤 千佳

作品名『夢十夜』

選んだ一行 百年待っていてください

ここ数年、分厚い本に辟易していた私は、テンポのいい短編集へと自然に手が伸びた。何気なく選んだが、怪談好きの私のストライクゾーンに、バシッと入り込んで来た『夢十夜』。こんな夢を見た、から始まる十の夜は、言葉が役割とリズムを持ち、幻想的で、夏の怪談のようにぞわつと怖く、雲に乗ったかのようにふわふわした感じから出来ている。

「百年待っていてください」

第一夜の、美しい女性が話すこの一文が、頭からも心からも離れず、切なくなつた。

漱石に対し気難しい優等生作家の印象しかなかった反動からか、意外な物語の運びに吸い込まれ、どんどん世界が膨らんでいった。

何にこんなにも心を引きつけられたのか。夢だから何でもありなのに、ほとんどの背景が闇の黒い色。怖い。そこに星のきらきらした色、女の人の赤い唇、真珠貝の銀色に輝く色、百合の花の純白、文を読んでいるのに、絵を見ているような不思議な感じだ。

その上、引き込まれたのは、私自身も表現するのが難しい不思議な夢をよく見るからだ。

夢には、自分の願望、思い出、後悔そして未来への希望までも現れる。自分の心の奥に潜んでいるかわいいた使も、憎たらしい悪魔も登場し、辻褄の合わないストーリーに心を奪われ、目が覚めてしばらくぼーっとしながら夢を反芻する。一日のスタートが良いか悪いかの別れと言っても言い過ぎではない。

漱石の書いている夢は実際に見たものではないかもしれないが、心の闇を吐き出している所は同じように思う。ただ、私には死の恐怖などがわからない。生きる喜びもいまひとつわからない。歳を取って、大きな病気をした時にこそ、この本をまた読んでみたい。

今年に漱石の代表作『こころ』の連載が新聞紙上で始まって百年にあたるそうだ。人に忘れられずに百年も持ちこたえる事の大変さ、人の寿命としても、手が届きそうで届かない時間の長さ、そう、百年というのは憧れでもあり、努力と継続の賜物であると思う。

百年後の現代にも通じる漱石の言葉、百年待ってくださいという文章は、恋だ、運命の人だ、生まれ変わっても一緒に、という少女漫画的な面だけでなく、漱石の心から発する自分の作品への、あふれる愛情をも感じる。

私も真似して書いてみると面白そうだ。

「こんな夢をみた：」、こういう日記も、自分で気づかない自分の心を写す鏡となるかも。文章とは、人を動かすエネルギーとなる。

文章をかたち作る単位となる言葉とは、そのエネルギーの源だ。使い方一つで、優しく暖かい毛布にもなり、鋭い刃物にもなる。

そんなことを常に、意識したい。

そして、こんなに短い文でも、ずしつと重く、長い時代を超えても、心にこっさり落とし物をして行く、不思議な魔力を味わうため、もっともっとたくさんの本と出会ってみたい。